

## 中米の「規模」と文化(コラム中南米)

著者	幡谷 則子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	6
号	2
ページ	31-31
発行年	1989-06-20
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00006609">http://hdl.handle.net/2344/00006609</a>

今年三月、かけ足でまわった中米3カ国（コスタリカ、グアテマラ、パナマ）は忘れられない旅となった。もともと出張目的はコロンビアとの比較の視点から、中米諸国のコーヒー産業組織と労働形態を見ることにあつたのだが、行ってみて「比較」すること自体 absurdo（ナンセンス）なことがよくわかった。理由は、一言でいえば初期条件の違いが大きすぎる、に尽きる。

運河と金融部門で経済の七割が成り立っている特殊なパナマは論外としても、コスタリカ、グアテマラは依然、外貨収入の三五〇四〇％がコーヒー輸出でまかなわれている。しかしながら、まず国土面積、国内市場の小ささ、生産・流通過程の要たる組織基盤の弱さをとつても、コロンビアのコーヒー生産組織をバイヤスに分析するのは誤りであろう。

かつその上に文化の違いが土地利用、労働形態を規定していることも見逃せない。特にグアテマラの場合に強く感じたことだ

が、同じ小農主体のコーヒー農園分布であっても、収穫期に働く出稼ぎ農業労働者は人口の六〇％を占めるインディヘナであり、これを campesinos asalariados と同一視できるかどうか、の問題にかかわってしま

う。

これはメヒコ、ペルーなどインディヘナ文化の根強い地域を知った者なら当然の現

## 中米の「規模」と文化



幡 谷 則 子

アメリカナイズされた消費文化社会である。これも地理的位置、政治環境からみてまた当たり前のことなのだが、中米諸国内の相違についても細かい神経をもつて見る必要がある。

とかく日本のラテンアメリカ研究者は大國主義で、中米諸国は十把ひとからげにし、かつ後回しに考えがちであるが、こうした態度は改めるべきであろう。

ちようと Semana Santa にさしかかったグアテマラでは、街は紫一色に染められていた。ククルーチョと呼ばれる、キリスト像の台座をかつぐ人々の礼装が紫で、これは四旬節のおわりに、キリスト

象であるのだが、今さらながら再認識した次第である。コロンビアで勉強していたグアテマラの友人が、地域開発の問題についての議論で、とかく「文化の問題」をあげてコロンビア人の中で浮いてしまっていたが、今になって彼の主張が納得できる。

同じ中米であつても、コスタリカ、パナマとなると、コロンビアなどよりはるかに

の受難を思う信者の罪のあがない、苦行 (penitencia) を象徴する色である。そしてなぜかこの季節は決まってハカラングが一斉に同じ紫の花をさかせるのである。ラテンアメリカではその多くが失われてしまったキリスト教の伝統の重みを久かたぶりに見た思いであつた。

(在ボゴタ海外派遣員)